

研究ノート

ハンセン病家族の生活誌

— 瀬戸内海の大島青松園とフィリピン・クリオン島の映像記録から —

吉田 正紀^{※1}

The Ethnography of Hansen Disease Families

— Documentary Films of Oshima Seisho En in the Seto Inland Sea and Culion Island in the Philippines —

Masanori YOSHIDA^{※1}

ABSTRACT

This paper discusses two documentary films of Hansen disease families by Kazuyuki Nozawa, documentary film director. One is “61ha kizuna” which describes the daily lives of an old couple living in a sanatorium facility of Oshima island, Seto Inland sea. The other is “Culion Dignity” which gives a very good picture of the daily lives of families in a small Culion island in the Philippines.

Nozawa asks what supports their daily lives, what makes them overcome their difficulties, what kind of bonds relieve their minds, and what kinds of life styles give them energy or strength which makes them happy.

Nozawa regrets his first encounter and reaction with a Hansen disease patient in Gunma but gradually transforms his attitude and behavior toward the Hansen disease in the process of making his films.

The documentary films of Nozawa are rare and important data revealing the real daily lives of the Hansen patients and families of two different cultures.

はじめに

近年、ハンセン病患者に密着し、苦難を生きた患者たちの希望と生活を描いた高木智子の『隔離の記憶』(2015)などのノンフィクションや、ハンセン病への偏見がいまも存在していることを指摘しているドリアン助川の『あん』の文芸作品や映画(2015)が話題となっているが、本論では、ハンセン病家族の日常生活を、映像によって記録し続けるドキュメンタリー監督野澤和之氏の作品をとりあげる。野澤の作品は、ハンセン病患者への偏見と彼らの隔離された境遇のなかで、患者とその家族が、つつましくも、ポジティブな生き方をしている現実を、文化人類学的手法を用いて、描写・記録した稀有なドキュメンタリー映画である(註1)。

ここで取り上げるハンセン病家族に関する彼の作品は、瀬戸内海に浮かぶ小島にある国立療養所「大

島青松園」に生きる一組の老人夫婦のドキュメンタリー『61ha 絆』(2011)と、フィリピンの孤島、クリオン島に生きるハンセン病患者の家族を追ったドキュメンタリー『Culion Dignity』(2011)である。

野澤は、ハンセン病患者が置かれた悲惨な状況を訴える被害者論や人権論を展開するのではなく、彼らの日常生活を支えているものは何か、彼らが苦難にどのように立ち向かってきたのか、彼らにとって、絆とは何かを語ろうとする。これら二作品は、生きるうえでの宗教的信仰、家族の絆や形成の在り方、仲間やコミュニティとの関わり、日常生活のなかに見出すささやかな生き甲斐などが、彼らにとって大きな生きる力となっていることを示している。

野澤は自らのハンセン病患者との不甲斐ない出会いから、彼自身どのように変貌しながら、ドキュメンタリーを作り上げたのか、彼のドキュメンタリー

※1 日本大学国際関係学部 元教授 Former Professor, College of International Relations, Nihon University

に取り組む姿勢をも同時に探ろうとした。

(1) 日本におけるハンセン病に関する近年の動向

ハンセン病はノルウェーの医師ハンセンが発見した「らい菌」による感染症で、皮膚の発疹や神経の麻痺などを引き起こす。感染力はとても弱く、1943年に特效薬が発明されて以来、感染の可能性がなくなったが、日本では、1931年「らい予防法（旧法）」が成立して以来、長い間、全患者が隔離の対象となってきた（朝日新聞 2016年4月5日、日経 同4月1日、産経 同5月22日）。

日本では、ハンセン病と診断された者は隔離施設で暮らし、名前を変え、故郷や外部との交流を遮断されてきた。結婚は許されたとしても、男性は妊娠させることがないように「断種」手術を余儀なくされ、女性はもし妊娠したとしても「墮胎」させられた。

1953年、「らい予防法」の新法が成立したが、隔離政策は維持されてきた。1996年4月、患者の隔離政策の元となった「らい予防法」が廃止された後も、法的には自由になっても、ハンセン病に関して、さまざまな偏見や差別がなくなったわけではなかった。

2001年、熊本地裁が隔離政策の違憲性を認め、国に賠償命令を下し、当時の小泉純一郎首相は控訴を断念し、謝罪している。2016年5月、最高裁は、昭和47年まで、元患者たちの裁判を、隔離された療養所などの施設に設置された「特別法廷」で行ってきたこと、またその扱いが差別的であることを謝罪したことは記憶に新しい（毎日新聞 2016年3月30日、読売新聞 同年3月31日）。

近年もこのようなハンセン病に関する動きがあったこと、2016年は、「らい予防法」の廃止から丁度20年を迎えたこともあって、日刊紙各紙がこぞってその特集を行い、ハンセン病が再び脚光を浴びた年であった。

現在、全国にある13カ所の国立療養所に暮らす入所者は、1,597人（2016年3月25日現在）で、平均年齢は83.9歳である。入所者の減少と高齢化が顕在化しつつある（朝日新聞 2016年4月5日）。このような高齢化にともなう国立療養所の施設の在り方、元患者たちへの支援の継続、2016年2月、患者たちによって起こされた損害賠償訴訟（毎日新聞 2016年2月16日）など、ハンセン病に関する課題はまだまだ解決されてはいる。

(2) 終わらない偏見と新たな知の源泉

ハンセン病に関するジャーナリズムの報道や研究・出版活動は2010年代になって、全般的に増加傾向にあるようだ（註2）。すでに述べたように、2016年「らい予防法」の廃止後20年という節目にあり、ハンセン病に関する報道ニュースが多いこともあるが、偏見に包まれたハンセン病に関する理解を求めようとする動きなのか、元患者たちの社会への主張が強くなったからか、人権問題への格好の攻撃材料となっているからなのか、引き続き注目をしていかなければならない。たしかに、患者以外の方が元ハンセン病の患者や彼らが生活する施設との交流や触れ合いが増えていることも事実である。変わらない偏見の現実を見ることによって、新たな知を得た人もあろうし、彼らへの支援を考え始めた人もいることであろう。

映画監督の宮崎駿は、これまで自宅近くにある国立療養所多磨全生園（東村山市）を何度か訪れたり、入所者と交流を続けてきた。彼自身、患者たちがこれまで置かれてきた歴史と現実を知り、ショックを受けた一人である。そのような関わりから、代表作の一つの『もののけ姫』のなかに「病者」としてハンセン病患者を思わせる人々を登場させている。さらに現在も隔離の歴史を伝える記念公園としての多磨全生園などの施設の保存・復元や「人権の森構想」の運動を、支援・協力している（朝日新聞 2016年1月29日）。

元ハンセン病患者と周辺の人々との人間模様を描いた映画『あん』は、作家・道化師・ミュージシャンのドリアン助川が2013年に発表し、ベストセラーとなった同名の小説（ポプラ社）を原作とした作品である。ロケ地は東村山市各地や多磨全生園である。

ストーリーを簡単に紹介すると、映画の舞台は東京郊外にある小さなどら焼き屋である。過去の過ちが原因で借金を背負い、鬱屈とした日々を送る店長の中年男の前に、あるとき一人の老人が現れる。店に雇われた老女が作るあんは、とても美味しく、評判となってどら焼き店は繁盛するが、急にびたりと客足が途絶える。それは老女が、元ハンセン病患者であるとの噂が広まったからである。男は店を去った老女が暮らす、町外れにある療養所を訪れ、そこで元患者たちが歩んできた人生を初めて知ることになる（大越裕 2016）。

河瀬直美監督、樹木希林主演の映画『あん』は2015年5月公開以来、日本で50万人以上の観客の涙を誘い、その年のカンヌ国際映画祭でも高い評価を受け、

フランスでも大ヒットした。

助川自身、いつかハンセン病の元患者を主人公にした、生きる意味を問う物語を書きたいと願っていたが、元患者たちの置かれてきた厳しい現実には二の足を踏んでいた。その後、バンド演奏を続けたり、菓子の専門学校に通ったりしているうち、たまたま彼のライブに多磨全生園から来た元患者が参加していて、それをきっかけとして彼らとの交流が生まれた。しばらくして多磨全生園を訪ねたとき、園内に菓子職人が作る「製菓部」があることを知る。自らも製菓学校であん作りに取り組んでいたこともあり、菓子作りをするハンセン病元患者の生きる姿なら書くことができるのではないかと思い、やっと念願の小説に取り組むことになった(大越裕 2016)。

宮崎駿やドリアン助川のように、実際にハンセン病元患者と出会うことで、ハンセン病や元患者への深い理解と関わりが生まれ、結果としてハンセン病患者の生と現実を社会に広く知らしめるという役割を果たした。さらに自らの生と知の再生にも役立っていることがうかがえる。

(3) 『61ha 絆』: 瀬戸内海の国立療養所大島青松園に生きる

瀬戸内海に浮かぶ孤島にある国立療養所大島青松園については、すでにその歴史やそこに暮らす人々の人生の語りなどについて膨大な資料が残されているが(註3)、『61ha 絆』は、大島青松園で寄り添って生きる70代の夫婦の日常生活を描いた野澤和之によるドキュメンタリー映画である。

登場人物の東條高は1946年18歳で、妻となる康江は1948年15歳のときに大島青松園に入所した。康江は、「3年経ったら治るからと、行け行けとみんなそう言った。私も3年もすれば帰れると思った。でも、ここに来て30年、40年もある人たちは、私を見て笑った。あほ、誰が帰れるものか。誰もが同じ嘘で騙されてたんや」と入所した当時のことを思い出す。その後学んだ詩で当時を回想する。「機織りを祖母に習い格子柄の布を織りたり15歳のわれ」。本当に悲しい時は涙もでないというが、その時涙も出なかったという。

その後、確かにわずか61haの島での生活が60年以上も続いている。本ドキュメンタリーのタイトルである「61ha」は大島の規模、絆は二人が島に隔離されている事実を示している。野澤は2005年初めて島を訪れたとき出会った東條夫婦が、互いに支え合い、強い愛の絆で結ばれている姿に深く感動し、それが

彼に本映画を作らせる動機となったという。野澤は、その後、数年をかけ、何度も島に足を運び、本作品を完成させた。

高と康江は1951年に結婚する。その時、高は21歳、康江は18歳。康江は「結婚していないと、面倒を見てくれる人がいないので、大変だよ」と言われ、結婚を決意する。

「晴れ着なく、祝の膳も無きままに、われらの結婚の式を挙げたり」

しかし、結婚して6年目、24歳のとき康江は失明する。その後、指の後遺症にも苦しんでいる。そのため今も、リハビリに余念がない。髪の毛を左右に束ねていた幼い少女も、後遺症のため、今は義眼のため目が少し出ているし、口元も開きがちである。

「24歳にて失いし、黒い瞳の戻りけり、義眼なれども」

「療園の貧しき時に目を病みて視力失い48年」

康江は、しっかり者の妻で、とにかく明るい。言語も明晰で夫婦の会話を終始リードしている。高もハンセン病を患い、身体の動きは十分とはいえないが、康江ほどでもない。笑顔がとても良い、ダンディーな男である。

食事の世話を含め、家事すべてを高が担っている。このような結婚生活について康江は、「初め、私が元気な時は彼の世話をした。彼の衣服を洗い、アイロンをかけ、服を繕ってあげた。でもその幸せなときも、わずか4～5年しか続かなかった。その後、私を世話しているのは高である。夫はこの結婚で貧乏くじをひいたわけや」とユーモアに語っている。

1) 日常生活

映画はひたすら、6畳ほどの狭い居間で過ごす二人の日常生活に焦点をあてている。野澤が2時間も続けてカメラを向けていると双方がくたびれてしまうようだ。

康江は、夫と腕のリハビリのために病院に行ったり、教会に出かけたり、カラオケの練習をしたりするほかは主に自宅で過ごす。高は毎日農作業のために、近くの畑に出かける。ビニールハウスもある本格的な畑だ。草取り、ジョーロでの水かけなど結構忙しい。そのおかげで、ナスやトマトや胡瓜やジャガイモやピーマンなどが食卓に出るし、近所の友人にもおすそ分けすると言ひ、野菜作りの楽しさを語っている。

「大晦日なれど夫は山畑に耕運機をかけてくると出てゆく」

高の家の中での妻への気配りは並大抵のものではない。トイレへ行くとき、靴下の履き替え、台所仕事などの他、「食事時エプロンかける、彼女の右手にスプーンを握らせる、皿のなかの食物を寄せる、ティッシュで口元をふく、エプロンはずしてあげる」などの介護を一切行う。そのような夫に、妻は「良い夫を見つけたわ。どこにもいないです。たよりにしてますよ」と笑顔で話す。

「山畑にトマトの苗を植え付けて、育てるは夫、食するはわれ」

「わが膝に天がのせてくれた大西瓜、子をあやすかのように暫し楽しむ」

「初生りのキュウリ4本持ち帰り夫はわが手に持たせくれけり」

2) 康江と詩：生きた証

すでに紹介したように、康江は俳句や和歌に造形が深く、病や信仰や夫になどについてさまざまな想いや経験を詠み、自ら歌文集『恵みに生きて』(2007)を編んだ。詩を通じて、彼女は自らの感謝の気持ちを伝えようとしているようだ。

「盲人となりたる我をいたわりてくれる夫との二人三脚」

「洗濯は機械がするよとさりげなく、働きくる夫よ、いとし」

「賜りし、津軽のリンゴを夫はむき、わが好物のパイを作りぬ」

詩は自らが生きた証だという。いづれ誰もいなくなっても、詩を見てほしい。この映画も生きた証となるからという。

3) 夫婦と信仰(註4)

24歳のとき失明した康江は、「杖をついて歩くのが恥ずかしい、情けない、笑われると思い、落ち込んでしまったが、それでは教会にも、盲人会にも一人で行けんだろうと言う、もう一人の自分の声を聞き立ち直った」という(『61ha 絆』)。そのとき詠んだ詩。

「右の手に白杖をつきて左手はイエスにすぎる私の人生」

高は妻康江が何日も高熱を出し、入院してしまったとき、「女房を助けて」と神に祈りを捧げた。幸い妻は奇跡的に回復したので、高はそのときキリスト教に入信したという。高が27歳、入所して10年経っていた。キリスト教信仰に支えられた康江の詩には、夫への感謝の詩が多い。

「高熱に喘ぎいるわれに、夜もすがら夫は団扇の風をくれたり」

「白菜も葱も夫のつくりたるもの食べらるる私の幸せ」

美しい海に囲まれた大島で暮らしてきた高と康江。

「生かされて生きる命の確かなり、沈む夕日も朝日とならん」

「夫とわれ五十五年の道程を歩み来たれり恵みに生きて」(東條康江 2007)

と生きること、生かされていることに感謝している。

4) 夫婦の楽しみ

夫婦の楽しみの一つはカラオケである。全国の療養所のカラオケ交歓会に出席するため、丁度、選曲とその準備を初めていた。古いレコードのジャケットにある楽譜をみて、夫はハーモニカを吹き、メロディーを確認する。夫がリードし、妻が少しづつ歌う。

熊本にある国立療養所菊池恵楓園で開催された「全国友園カラオケ交歓会」に夫婦で参加する。夫は妻を気遣い、幕の裏側から彼女の歌声を聞く。夫は白いスーツにバラの花を胸に付け、サングラスをかけて美声を披露する。

二人が辛いことを忘れさせるほど楽しんだのはラジオである。康江は相撲、野球、淡谷のり子の流行歌、「私の本棚」などの朗読番組を特に好んだという。

5) 世界の人々に知ってほしい；夫婦の願い

外部の世界の人たちも、島の住民たちも、自からを「座敷豚」と卑下して呼んだ時代があった。終日寝そべり、食べ、のんびり暮らす豚になぞられて付けられた呼称である。「それは酷い。とくに懸命に生き、最善を尽くしているわれわれをととても傷つける言葉である」と康江は反駁する。

康江は、「私が本当に世界に知ってほしいことが一つだけある。この島に住んでいる人たちのことである。ハンセン病にも拘わらず、人生で最善を尽くしてきける島の人たちのことである」と語る。彼女らが進んで野澤の映画づくりに積極的に協力したのも、そのような強い願いが彼女のなかにあったからである。

映画は、単にハンセン病に侵され、隔離されてきた二人の苦しみを描こうとしているのではない。むしろ、青松園で60余年生きてきたカップルが、互いに寄り添い、慈しみあって生きる姿を、時には切なく、あるいはほっとした、羨ましいような気持ちに

させる映像となっている。

(4) 『Culion Dignity』—フィリピンの孤島で明るく生きる元ハンセン病患者たち

1) クリオン島とハンセン病

クリオン島は、フィリピンの南西部カラミアン諸島の中に位置する島である。その面積は、約390平方キロメートルほどで、日本の佐渡島の半分より小さい。

クリオン島は米国の統治時代に、ハワイのモロカイ島カラウババ療養所にならい、ハンセン病の隔離地に選定され、1906年に約350人のハンセン病患者を受け入れた。1910年代には、5,000人を越えたこともあり、「世界最大規模の施設」と言われていた。日本にも、国立療養所があるが、日本での隔離政策を進めるにあたり、当時の関係者はクリオン島を視察している(『クリオン通信』創刊号、モグネット 2006)。実際日本からの患者も何人か連れていかれ、現地で亡くなっている。岡山県の離島長島に1930年に設立された国立療養所長島愛生園は、このクリオン島を模している(高木 2015)。

米国統治時代、患者は隔離されていたが、断種は人口の多くを占めるカトリック信者の反発で撤回された。今やハンセン病は、薬によって完治する病気であるが、島には治癒しても後遺症に苦しむ元患者が、今も百数十人いる。2013年現在、105名である(『クリオン通信』第10号、第13号)。彼らは毎月政府から2,500ペソ(約5,500円)を支給され生活している(毎日新聞 2014)。手足に障害が残りながらも、家族と漁や農業にいそしみ、幸せそうに、孫たちと過ごす姿がうかがえる。とはいえ、日本の元ハンセン病患者のように、高齢化が目立つ。数十年もすれば、元ハンセン病患者は居なくなるかもしれない。それゆえ、野澤は「ハンセン病に虐げられた人々の歴史、埋もれゆく事実の記録」を残すこともこのドキュメンタリーの使命でもあると感じている。(『クリオン通信』第2号)(註5)



写真1 イエズス会の教会

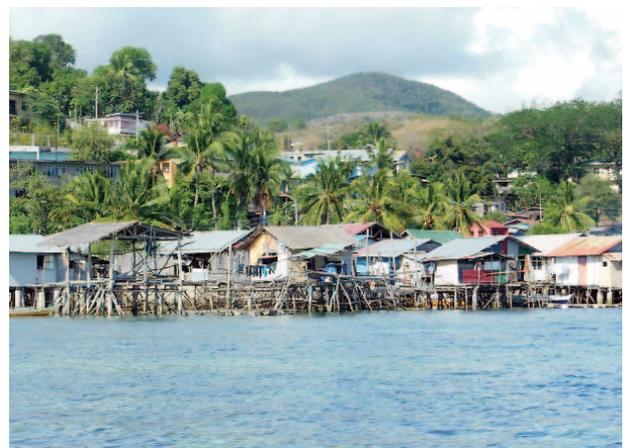


写真2 クリオン島の集落

(筆者撮影 2016年5月)

2) クリオン島の元ハンセン病患者とその家族

クリオン島のハンセン病患者たちは結婚し、家族を持つことができた。でもそこに至るまでには患者たちと病院や政府との戦いがあった。施設ができた当初はハンセン病患者同士の結婚は禁じられていた。病気に対する免疫力の弱い子供の誕生を予防するためであった。しかし隔離の生活が長引くにつれ、クリオンで新たに愛する相手を見つけるようになり、婚外子が急増することになる。最終的に1934年、結婚は認められるようになった。カトリックが最大の勢力であったフィリピンでは、離婚や断種手術には強烈的な反対の声があった。結婚は認められたとはいえ、子供は保育園で育てられることになった。とくに症状の出なかった子供たちはマニラの孤児院に移された。1934年から38年の間に、一年だけでも約142人のこどもが生まれた。健康な子どもたちの多くは、クリオン島から送り出された。(モグネット 2006)(註6)

しかしながら、1974年の新しい条例によって、離

れ離れになったクリオンの島民と一緒に暮らせるようになり、ハンセン病に罹っていない家族も島で暮らすようになった。島のなかでの差別を急速に薄れさせた出来事は、1985年に導入された多剤併用療法（MDT）であった。現在のクリオンでは、ハンセン病に罹っても、罹ったことがあっても、それが障害になることはなくなった（モグネット 2006）。

現在、クリオン島のほとんどの人がハンセン病のことを知っている。しかも、恐ろしい病気だとは感じていない。小さな子供たちまでそうだ。手足の変形などハンセン病の後遺症をもった人に対しても平気でハグやキスをする。親類縁者に、ハンセン病患者がいたとしても、隠したりはしないし、それが結婚する妨げにもならない。ハンセン病の人とハンセン病でない人との結婚もみられた（『クリオン通信』第9号）。

今日、クリオン島は独立した行政単位として発展し、島には元患者間で生まれた子たちを中心に人口が増加し、2万人を越えるほどになった。その70%が元ハンセン病患者を親にもつ人たちである。

一方、ハンセン病は遺伝しないと言い続けながら、ハンセン病は恐ろしい病気だと宣伝し、隔離や断種を続けてきた日本と大きな相違がある（『クリオン通信』第9号、東京新聞 2014）。

3) Culion dignityの主役たち

本ドキュメンタリーを支える、クリオンでハンセン病と闘い、生きてきた4人の主役たちを取り上げる。

①子宝に恵まれたコンセプション

2012年4月現在、73歳になるコンセプション・ヘルメディア（以下 コンセプション）はクリオン島生まれである。両親もクリオン生まれで、ハンセン病に感染していた。7歳のとき、両親を戦争の飢えで失い、その後、クリオン島の施設で育てられた女性である。妹が一人いるが、感染はしていず、現在は島外に住み、多くの子どもを設けている。

彼女は島の高校を卒業し、25歳でハンセン病でない男性と巡り会い結婚。8人の子どもを育て上げる。素晴らしい人生といえる。子どもたちは誰も感染していないが、彼女には手と足と鼻にハンセン病の後遺症が残っている。

実は、彼女は結婚してからハンセン病が発病したのである。多剤併用療法で完治したのだが、顔まで後遺症が残ってしまった。さらに30歳のとき夫を亡

くしてしまう。わずか5年の結婚生活であった。貧しさで病で苦勞したが、それを乗り越えて生きてきた（『クリオン通信』第5号）。

感染防止を理由に子どもは一時、強制的に引き離されたが、現在はみな島外で、元気に暮らしているという。国立クリオン療養所兼総合病院によると、当時、患者の結婚は、子を施設や島外に移すのが条件で認められたが、なかには生き別れになった親子もいたという（東京新聞 2014）。クリオンでは幼児の隔離がなくなったのは、すでに述べたように、戦後、薬でハンセン病が治癒するようになってからのことである。

毎朝彼女は早く起きて、コーヒーを飲みながら月を見るのが好きだという。その後、夫と娘の一人が眠る墓地に出かけるのが日課だ。四角いコンクリートで覆われた立派な墓地を自ら購入したという。36歳という若さで亡くなった夫の隣に、一人の子供の墓もある。夫の墓碑がないのは、思い出があり過ぎるからだと言いながら、墓の上に落ちた汚れた葉を手で払いのける。

後遺症で指先が曲がっているが、日中は、よく毛糸の編み物をしている。ペプシコーラが好きで、野澤監督はいつもお土産に買っていく。

コンセプションは、「指先や鼻を失ったが、病に耐えた。子どもは元気に巣立った。たくさんの人に囲まれ幸せ」と語る（東京新聞 2014）。子どもたちは島外で暮らしているので、近所の人たちに世話をしてもらいながら、一人で生活している。クリオン島を訪問したとき彼女に会った澤田治郎さんはそのような生活は東京では考えられないと驚いている（『クリオン通信』第5号）。

コンセプションは、「人生は、辛いけど、生きるためには何でも挑戦するわ。ハンセン病だって克服できるのよ」と日焼けした顔だが、くずれた笑顔には、年齢を超えたカワイさと威厳さがあった（『クリオン通信』第5号）。

②なかなか漁に出ない漁師のギリ

元漁師のギリは、野澤監督が気になる主人公の一人である。2012年現在、65歳となるギリは、ハンセン病のために漁業の仕事を断念せざるを得なかった。後遺症で指を喪失していて、ものを掴むのも難しい。そのため、現在は国から支給される手当てで細々と暮らしている。

ギリは9歳のとき別の島から来たようだ。ハンセン病のギリを島に連れてきた母は、彼を置いてどこ

かへ行ってしまったという。小学生のころは、一人ぼっちであったが、17歳のとき漁師になった。20歳のときハンセン病でない女性と結婚したが、30歳頃離婚する、当時、症状は目立たなかったという。現在、彼は海に張り出した粗末な水上家屋に養子の娘夫婦と生活している。娘は14歳で子どもを産み、現在3人の子供がいる。

野澤とは今や借金をするほどの間柄である。空の財布を空けて、お米を買うお金がないので、200ペソ貸してほしいというので、野澤は近くのコメ屋と一緒に行く。「魚を獲ったら好きなだけあげるよ。カズは私の友達だからな」という（『クリオン通信』第4号）。海の上に張り出した自宅の修理には、ベニヤ板や釘などの提供を受けただけでなく、友人のジョーが大工仕事をしてくれた。さまざまな面で、ギリは自治体をはじめ、多くの人のお世話を受けて生活している。

野澤は、ギリが漁をしている姿をどうしてもカメラに収めたかった。果たしていつ出漁できるか、いらいらしているようだ。出漁の約束をしても、「雨が強すぎる」、「風があるから」、「海が荒れているから」とか、さまざまな理由を付けて引き伸ばされてきた。「ギリさん、いつ漁に出るんですか」と尋ねると、「天気聞いてくれ」といつもながら、歯が抜けた笑顔で答える。しかし愛嬌に溢れている。

ついにある風の朝、突然出漁の時がきた。娘婿と共同で使っているというエンジン付きの小さな船に乗ると、ゆっくり沖へ出て、糸を垂らす。しばらくして小さな魚が獲れ始めた。ギリは遠くから、監督にポーズをとる。黒い顔のなかで、白い歯が見えた。エンディングに彼の釣りの様子が映し出され、ほっとした気分させる。やはり漁師だった威厳を漂わせているようだった（『クリオン通信』第7号）

だが2014年、ギリは腎臓疾患で急逝する。キリスト教方式で埋葬されていたが、貧しくて十字架が用意できていなかったため、野澤らが大工に頼んで作ってもらい、墓地に収めた。

③元市長のギア

ギアはルソン島のバタンガスで1942年10月21日に生まれた。9人兄弟の末っ子であったが、幼いとき顔に症状が出て何か変だと感じていた。他の兄弟のうち何人かはハンセン病に感染していた。9歳のとき、クリオンの療養施設に連れて来られて以来、ギアはハンセン病であることの苦楽を身をもって体験している。苦学して英語の教師になり、クリオンの

学校で教鞭をとった。クリオンの自治運動にも参加して初代市長になった。

ギアには子供がおらず、奥さんと二人暮らしだ。だが島の子供7人を養子として育て、今や孫たちも島にはたくさんいる。ギアは、野澤にとって、島のハンセン病の歴史、差別体験、彼自身のおいたちに至るまで、何でも話してくれる先生のような存在であった。教師や市長を経ていたので、驚くほど幅広いネットワークをもっていて、多くの人を紹介してもらった。また、島の将来、失業問題など、深い会話も可能であった（『クリオン通信』第8号、第11号）。

『Culion Dignity』制作の現地でのキーパーソンは何と言っても元市長のギアである。野澤はギアがいなければ、この映画はできなかつたとさえいう。奥さんは野澤がクリオンに来始めてから間もなく、2011年に他界する。残念なことに、ギアも病に倒れ、2016年2月帰らぬ人となった。

④キャッサバを栽培するバントグ

バントグは、クリオンの先住民（タグバヌア）で、島で農業を営んで暮らしている。寡黙で、タガログ語や英語はよりも、クリオンの言語の方が得意である。野澤は初対面のときから、彼にオーラを感じていた。「これだ。これだ。ギアさん。ハンセン病の偏見を超えるには、このバントグの生き方をきちんと紹介するほかはない」と直感し、そのことをギアに繰り返し言ったことを覚えている。（『クリオン通信』第8号）。

2012年現在、63歳になるバントグもハンセン病のために、かつて漁を諦めた一人で、現在はキャッサバ栽培をしている。山の出入りに建てられた粗末な小屋で、50歳になる妻のベロニカと、彼女の小学生くらいの娘と息子と一緒に暮らしている。共に再婚で8年目を迎える。

バントグは右足の膝から下を喪失しているため、自前のプリキ製の義足を使って畑仕事に出る。町にも散歩で出かけることがある。藪の草取りやキャッサバのイモ掘では、右手に斧をゴムで止めて作業をする。後日、再訪したとき、バントグとベロニカが雑草の生い茂る畑に這いつくばり、素手でキャッサバイモを引き抜いてくれた。畑仕事を見たいと言っていたことを覚えていてくれたのである（『クリオン通信』第4号）。

彼らの生活は本当に貧しいが、ベロニカはバント

グとの生活は幸せだし、ハンセン病はとくに怖くはないという。父もハンセン病であったせいもある。バントグもキャッサバ栽培ができるので幸せという。自らを惨めだとか、不幸だとか問わず、穏やかに生きている。

野澤は、ギアから2012年10月2日にバントグが死去したニュースを受け取った。享年63歳であった。ベロニカの話では、「バントグは、尿が出なくなって入院し、回復することもなく、そのまま逝ってしまった」。腎臓病が原因だった。ベロニカもバントグが亡くなると、政府からの支給金がなくなり、厳しい生活となるはずだ（『クリオン通信』第6号）。

筆者が映画のなかで見た、バントグの子どもたちの水浴び、質素な料理、食べ残しの料理をあさる犬と猫、居間と台所間の高い仕切り、町のパン屋で美味しそうにパンをかじるバントグの映像などが思い出されるが、最も印象深いのは、義足をつけ、右手に斧を縛り付けて、右手を大きく振るいながら、草やキャッサバに立ち向かうバントグの姿である。

野澤たちは、2013年3月、ハンセン病患者が埋葬されている村の墓地を訪れた。バントグの墓は中古のブロックで囲まれた粗末な墓だった。野澤は彼が好きなタバコ「チャンピオン」に火をつけて置いた。墓地からは海が見えた。

（5）野澤和之のハンセン病との出会いとドキュメンタリー

野澤にとって、ハンセン病とは何なのだろうか。彼は初めて、友人の紹介で群馬県草津にあるハンセン病療養所の一つ、栗生楽泉園を訪ね、そこで生活するYさんに会った時の反応を回想する。「茶碗を洗う麻痺した指。お茶を入れるその指。少し歪んだ口元。ハンセン病回復者の後遺症の様子を見ている自分の姿だ。入れてもらったお茶を飲む自分。確か、お茶のお変わりは断ったような気がする」。「今でも自分を許せない反応がある。それは入浴を断ったことだ。楽泉園には草津温泉の湯が敷かれていた風呂がある。Yさんは園内にある温泉に入っていくなさいと進めてくれたが、ハンセン病患者が毎日入る風呂と聞かされて、おののいてしまった。不甲斐なかった」。その時、Yさんのドキュメンタリーを撮ろうと計画していたが、彼には東京に住む妻子もいることもあり、計画を断念した。その後、Yさんは肝臓病でなくなってしまった。野澤にとって、ハンセン病の患者との最初の出会いはこのように忸怩たる思いで詰まった記憶がある（『クリオン通信』第13号）。

2014年、野澤は栗生楽泉園に宿泊する機会があった。その時は何度も何度も園内の風呂に入った。この小さな湯船に何人の人が回復を夢見たことだろうか？茶色に染まった床が妙に印象的であったと語っている。野澤は、Yさんとの出会いがあったからこそ、その後のハンセン病に関わる作品が生まれたと確信している。『Culion Dignity』の完成まで、その時から17年かかったという（『クリオン通信』第13号）。

野澤自身、文化相对主義という文化人類学の思想を学んだとはいえ、当初は異質なものを忌避し、怖れていた。しかし、ハンセン病のドキュメンタリーを制作する過程で、まさに真の人類学者に変貌する。それはさまざまな地域に暮らす人々の生き方に同じ目線で接し、語り、友人として接する態度をとることができるようになり、彼らとの信頼関係が築かれたことを意味する。クリオンの人たちは、彼をカズ、カズとよび、ある友人は彼の子供にkazという名をつけた程だ。さらに彼は日本にいる友人たちをも応援団として巻き込んだ。真の共同作業ともいうべきドキュメンタリーを作りあげていく。

彼に同行した田寺順史郎は、野澤のドキュメンタリーの作り方と対象への関わり方を驚きをもって記している。「作品のなかで例をあげると、漁師「ギリ」の小屋でコーヒーを飲むシーン。ギリがしゃぶったスプーンを彼も使って飲んだ。映像にはないが、奨学生メロディーさんの実家（小さな木造小屋で生活している一家）で、彼が持参した日本のカレールーで母親が作ってくれた、カレーライス（時々ハエが集まってくる）「美味しい」と言って頬張る彼がいた」（『クリオン通信』第13号）。そこにはもはや、かつてのような、ハンセン病患者を忌避するような野澤ではなくなっていた。

（6）野澤和之のクリオン島との出会い

野澤とクリオン島との出会いはハンセン病にあった。前作で、瀬戸内海の島にあるハンセン病療養施設で暮らす老夫婦のドキュメンタリーを制作する過程で、日本における隔離政策の歴史を調べる機会があった。その中で出会ったのがクリオン島である。戦前、今日ある国立療養所を各地に設けるにあたり、隔離政策を推進する長島愛生園の林文雄医師が世界のらい施設を訪問したとき（1933-1944）、この島を視察していることを知った。フィリピンのマニラでストリートチルドレンの映画『マリアのへそ』を製作したこともあり、フィリピンと聞くと、好奇心が芽生えてくるからという（『クリオン通信』第11号）。

クリオン島はどんなところなのか、現在どうなっているのか、ハンセン病患者は何を想い、どんな暮らしをしているのか、目で確かめたいと思っていた。できればその現実を映像で伝えたいと考えていたという。

彼がクリオン島を訪れる機会がもてたのは、大学の先輩である近藤富士夫がキシリトール島を訪れる旅行に便乗し、帰途クリオン島に立ち寄ったときが始まりである。他の同行者である田寺も、近藤ともども、クリオンのドキュメンタリー作りに大きな貢献をしている。彼らは、自主映画の制作委員会を立ち上げたり、クリオンを世に知らせる「クリオン通信」を発行したり、クリオンの若者たちに夢を与える「Kaz & Friendship奨学金」を設立・実施するなどの活動に関わるようになった（『クリオン通信』創刊号、11号）。

（7）野澤の人々への関わりとドキュメンタリーの手法

野澤のドキュメンタリーの手法は、筋書もなく、至る所で出会う人が勝負となる。彼はクリオンでの作品づくりについて、「この作品には幾人かのハンセン病患者が登場する。私はそれぞれの出会いからカメラを回し始めた。台本もないし、友達も誰もいない島。そこで、人間関係を構築しながらカメラを回す。出会う人とは簡単な自己紹介。それが時間とともに、関係性が続き、深まっていく。撮影が継続できるのは、関係が深まった人々である。そんな彼らは、心打ち解け、生活を丸ごと見せてくれる。そして彼らが何を考えているのか生活しているのかも分かるようになる。そこからはじめて物語がうまれる。展開は予想できないとしても」と率直に語る（『クリオン通信』第9号）。

野澤は、「島を訪問する毎に彼らと接触、交流をはかっている。ともに飯を食う。共に酒を飲む。共に語る。語るとハンセン病に罹ったことによる人生の悲劇物語は、すぐに発せられる。私は、共に飲むしか術がない」（『クリオン通信』第2号）。そこには、彼の対象との関わり方の基本形が現れている。時間の経過とともに、カメラは撮る者と撮られる者の関係の変化を映し出していく。彼自身の変化も含めて。それが映画を見る人たちにも伝わっていく。

クリオンでの野澤の映画作りに何度も同行し、彼のインタビューを身近で見た田寺は野澤の方法に驚く。「野澤監督は、自前のポータブルカメラを自ら巧みに操り、一人でどんどん撮って行く。その場に

居合わせた人を簡単にインタビューしてしまうのだ。誠に見事と言わざるをえない。・・監督は初対面の人と二言三言話しただけで、すぐ先方は打ち解けてしまう話術を兼ね備えていて、二度目に会ったらもう旧知の仲。「Hi, Bantog, How are you?」と大声でハグハグ。先方はカメラなど全く意識なく、対話が弾む。家庭のこと、家族子供、孫の話、そしてハンセン病について本人の考えなど、本題を何気なく聞き出してしまう。自分のペースだ」（『クリオン通信』第11号）。

おわりに

野澤は瀬戸内海と南シナ海の離島に暮らすハンセン病患者のドキュメンタリーを撮ってきたが、「船からみたクリオン島の印象が、瀬戸内海に浮かぶ大島の印象と全く同じだった。2つの島が重なって見えた」という。日本のハンセン病隔離政策は、1907年から始まり、瀬戸内海に療養所ができたのが1909年。クリオン島の施設は、それより3年前の1906年に開設されている。二つの島がハンセン病に関わって100年以上。ほぼ同じ時代の歴史を作ってきたといえる（『クリオン通信』第3号）。

クリオンで出会った元ハンセン病の人たちも、大島青松園の東條カップルのように、悲壮感はない。野澤は「指がうまく使えなくても、使える部分で何とかする、うまく歩けなくても誰かが手を貸してくれる。ハンセン病でも結婚して家族とともに過ごしている。今をきちんと生きているのである。貧しくても、米と魚で生きている。（彼らには）一定のエネルギーがある」と述べている（『クリオン通信』創刊号）。

『Culion Dignity』のエンディングで野澤は、「私が島で出会う人々は、試練を克服して生き抜いている。それは私に尊敬の念を抱かせる。そこには人間に備わる生きる根源的な力が満ちている」と彼らへの賛辞を綴る。

野澤は、当初「ハンセン病」をキーワードに撮影を続けてきたが、撮影を続けるうちにそれを忘れるようになってきたという。その答えは『Culion Dignity』のタイトルにも反映されている（『クリオン通信』第9号）。彼はすでに述べたように、ハンセン病患者の被害者論や悲劇論や人権論を書くつもりはない。ドキュメンタリーを通じて、人々が求めている究極の愛や生をどう描くか、カタルシスを感じるような感動を得られる映画をどうしたら撮れるのかに関心が移っている。結果として、クリオンの映画にしても、

青松園の映画にしても、誰か支援する人たちが必ず出てきた。彼らは元ハンセン病患者に真摯に向き合う野澤を支援することが自らの使命と考えているのかのようだ。野澤も映画作りこそが彼に与えられた使命だと思い、今何を伝えなくてはならないか、有限の時間との闘いであることを自覚している。そのような熱い想いを筆者も支援者の一人として共有したいと感じている。

(註1) 野澤和之のプロフィール

1954年生まれ。新潟県六日町出身。立教大学大学院文学研究科博士前期課程修了。記録・文化映画の助監督を経て、テレビの報道の道を歩み、ドキュメンタリーの世界に入る。文化人類学を学んだ経験から、文化・社会の周縁にいる人々を見つめた作品が多い。2004年に公開されたドキュメンタリー映画『Haruko (ハルコ)』は、在日韓国人一世の母親の半生を描く。2007年には、フィリピンのストリートチルドレンを現地オールロケで『マリアのへそ』(文部科学省選定)を撮った。2016年には自然信仰の復活を描いた『ニソの杜』を発表。さらに現在、韓国の小鹿島(ソロクト)で、ハンセン病患者を扱った第三の作品を準備中。

(註2) ハンセン病に関する近年の出版物 (2011-2016)

- 小林慧子 『ハンセン病の軌跡』同成社 2011
八重樫信之 『輝いて生きる—ハンセン病国賠償訴訟判決から10年』合同出版社 2011
高山文彦 『火花 北条民雄の生涯』七つ森書館 2012
上野哲夫、山本尚友、花田昌宣編 『ハンセン病講義—学生に語りかけるハンセン病』現代書館 2013
権 徹 『てっちゃん ハンセン病に感謝した詩人』彩流社 2013
ドリアン助川 『あん』ポプラ社 2013 (DVD 2015)
井深八重、星倭文子 『ハンセン病患者に生涯を捧げた会津が生んだ聖母』歴史春秋社 2013
桑畑洋一郎 『ハンセン病患者の生活実践に関する研究』風間書房 2013
藤田三四郎 『合歡の木は揺れて』新葉出版 2013
青山陽子 『病の共同体』新曜社 2014
笹川陽平 『残心：世界のハンセン病を制圧する』幻冬舎 2014
弐雄二著 姜信子編 『死ぬふりだけでやめとけや 弐雄二詩文集』みすず書房 2014
黒衣愛良 『ハンセン病家族の物語』世識書房 2015

無らい県運動研究会 『ハンセン病 絶対隔離政策と日本社会』六花出版 2015

片野田斉 『きみ江さん ハンセン病を生きて』偕成社 2015

高木智子 『隔離の記憶 ハンセン病といのちと希望と』彩流社 2015

ハンセン病市民学会 『いのちの証を身極める ハンセン病市民学会年報2014』解放出版社 2015

ハンセン病フォーラム編 『ハンセン病日本本と世界(病い・差別・生きる)』工作舎 2016

福西征子 『ハンセン病療養所に生きた女たち』昭和堂 2016

藤野豊 『孤高のハンセン病医師小笠原登「日記」を読む』六花出版 2016

(註3) 大島青松園の歴史とそこに生きる元患者の人生に関する記録が最近出版された。阿部安成(2015)と国立療養所大島青松園編、近藤真紀子監修(2015)である。そのほか、青松園を舞台にしたドキュメンタリーに、宮崎信恵監督の『風の舞』(2003)がある。2013年1月1日現在、青松園の入所者は男性42名、女性41名、計83名、平均年齢 80.6歳である(阿部安成 2013)。

(註4) 大島青松園には、二つのキリスト教会がある。開園まもなく、信徒たちによって設立された「キリスト教大島霊交会」と1950年に設立された「大島カトリック聖心使徒会」である。専任の牧師はいず、島の外から、礼拝のために招く。高齢化のため、教会の活動は衰退し、信者は減少している(阿部安成 2013)。

(註5) クリオン島へ行くには、通常はマニラ国際空港から国内線で約一時間、隣島のブスアング島のコロソ空港に着く。そこから港のあるコロソ・タウンに乗り換えて移動。海路を用いると、マニラ港からフェリーで一晩かけてコロソ・タウンに到着。そこから定期便かチャーターしたバンカーボート(アウトリガー付のボート)に乗り、約1時間半でクリオン島に到着する。島の中央に、当初からクリオン島で宣教活動をしてきたカトリック教会、特に男子修道会のイエズス会創始者のひとり、初代総長イグナチオ・デ・ロヨラ(1491-1556)の像が大きく迫る。

フィリピンのクリオン島とハンセン病の歴史については、モグネット『ハンセン病の歴史：フィリピン・クリオン島』(2006)に詳しい(<http://www.mognet.org/Hansen/overseas/culion01.html>)。

(註6) クリオン島で、ハンセン病夫婦から子供が

一番生まれた時代は1930年代である。1933年88人、34年155人、35年134人、36年138人、37年144人、38年139人、39年121人、40年108人、41年92人という記録がある (Ma Cristina Verzola Rodriquez 2003:174)。

参考文献

青木希 「宮崎駿監督、生への思い「もののけ姫」ハンセン病患者」『朝日新聞』 2016年1月29日

阿部安成 「選集を解く—国立療養所大島青松園で結ばれたキリスト教霊交会の歴史記述」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.187. 2013

阿部安成 『島で ハンセン病療養所の百年』サンライズ出版 2015

大越裕 「現代の肖像 ドリアン助川作家・道化師・ミュージシャン」『アエラ』 朝日新聞社 2016年7月25日号 pp.56-60

ドリアン助川 『あん』ポプラ社 2013

河瀬直美 『あん』ポニーキャニオン 2015

国立療養所大島青松園編 近藤真紀子監修 『大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り』風間書房 2015

クリオン通信編集部 『クリオン通信』(創刊号から第13号)、クリオン通信野澤和之オフィシャルサイト 2011~2015

高木智子 『隔離の記憶 ハンセン病といのちと希望と』彩流社 2015

Ma Cristina Verzola Rodriquez *Culion Island-A Leper Colony's 100 Year Journey Toward Healing*, Foundation

ASESVAD (クリオン財団) 2003

野澤和之 『61ha 絆』インターナショナル映画株式会社 2011

同上 『Culion Dignity』Culion Dignity制作委員会 2014

モグネット 「ハンセン病の歴史：フィリピン・クリオン島」星野奈央訳 2006 (原典は上記Ma Cristina Verzola RodriquezのCulion Island, クリオン財団 2003)

宮崎信恵 ドキュメンタリー映画『風の舞～闇を拓く光の詩』共同映画株式会社 2003

東條康江 『歌文集 恵みに生きて』東條康江自費出版 2007

東京新聞 「ハンセン病断種を問う」 2014年4月9日付

毎日新聞 「自宅も農園も失った フィリピン台風被害から5ヶ月」 2014年4月4日付

日本経済新聞 「ハンセン病をめぐる経過」 2016年4月1日付

産経新聞 「おやこ新聞」 2016年5月22日付

朝日新聞 「廃止されて20年 らい予防法って何？」 2016年4月5日付

毎日新聞 「ハンセン病家族提訴 熊本地裁 集団で国家賠償請求」 2016年2月16日付

毎日新聞 「最高裁隔離法廷は差別、ハンセン病有識者委員会」 2016年3月30日付

読売新聞 「ハンセン病隔離法廷 最高裁謝罪へ」 2016年3月31日付